

第2節 研究の充実

1. 総合研究体制の内実化

大学における活動は、教育と研究であるとはよく言われることである。しかし、日常的な研究活動が新たな教育の内容となることを考える時、真に重要なことは研究活動にあると言うべきであろう。また研究活動は、一方では個人的営為ではあるが、その個人の研究意欲を喚起すると同時に研究を活性化し、一定の方向性を与える意味において、一方では組織としての研究活動も問題とされなければならないのである。

大谷大学は文学部に7学科、短期大学部に3学科を有しているが、いずれも人間に関わる事象を研究対象とする点において、それぞれに独立・異質なものではなく、それらは相互に関連、補完しあう関係にあると言っても良いであろう。文学部の国際文化学科や短期大学部文化学科の新規開設もそれまでの研究分野と異質なものが生み出されたのではなく、従来の学科内容の総合の上に組織されたものであるにすぎず、その意味で研究体制の総合化が大学の活性化、発展のために大きな課題となるのである。

1982（昭和57）年、博綜館新築にあわせ、1965（昭和40）年に6学科体制が整備された時以来行われてきた6学科に8研究室の体制が改められ、4群6層の新構想研究室体制が発足した。このことは単に物理的な研究室の整備としての意味を超え、大谷大学の研究体制全般に関わる新たな理念の確立を求めた出来事でもあった。

従来の8研究室体制のもとでの研究体制について、8研究室が個別化の縄張りを生み、研究者の意識を狭小化しやすいものであるとし、16分野の孤立的で非生産的な機能の弊害は除去されなければならないと指摘して、混合に堕しない学問分野ごとの個別性を確立し保持しながら、学問分野を超えたところに総合するという、真の総合を模索して4群6層の研究室体制は出発したのであった。

つまり、内容的関連により新たに統合された4分野が、資料を共有し、書庫を媒介として有機的に連携し、学科間・研究室間に生ずる孤立性・閉鎖性を廃して、相互の連繫を求め、総合化をはかることを通して、学問的視野と意識の拡大を意図したものである。

また、1981（昭和56）年開所された真宗総合研究所も、その名称に象徴されるように、学内の研究体制の総合化を意図したものであった。近世以降の学問研究を支配してきた細分化・専門化の問題点が、6学科16分野の閉鎖性の克服という形で総合化を要求し、同時に教育が研究の障害となり、研究が教育をなおざりにするというジレンマが両者の総合化を求めるといふ、二様の意味を含んで真宗総合研究所として結実したと言って良いであろう。

このように、学内の種々の問題を解決しようとする営みが、総合化というキーワードであり、その具体的な現れが研究室体制であり、真宗総合研究所であったと言うべきであるが、それがどのように具体化し、実現してきたかは個々の問題の検証に待たねばならないであろう。

2. 研究の実状

(1) 大谷大学

文学部

真宗学科（真宗学）

仏教学科（仏教学・インド学）

哲学科（西洋哲学・倫理学・宗教学）

社会学科（社会学・教育学）

史学科（国史学・日本仏教史学・東洋史学・東洋仏教史学）

文学科（国文学・中国文学・英文学・ドイツ文学）

国際文化学科（国際文化学）

信念の確立をめざす

本学の基本姿勢は、人間として真に豊かに生きるための「自己の信念の確立」という、明確な建学の理念をかかげていることに象徴される。文学部の教育課程もまた、この理念のもと、仏教を基礎にすえた総合的人間学をめざしている。

文学部は現在、7つの学科で構成されている。仏教的人間学の根本となる真宗学科と仏教学科があり、西洋的人間学としての哲学科がそれに対置されている。また、社会を構成し、歴史を創り上げ、文学として自己を表明し、異文化と交流してきた人間、それらを究明するために社会学科、史学科、文学科、国際文化学科の各学科が設置されている。従って、文学部における専門の研究テーマは、すべて人間に関わる学問であるが、学科・分野の枠組みを越えた学習・研究が可能となる制度を設けることにより、より総合的な人間学へのアプローチをめざしている。

独自の教育課程

文学部では、1992年度入学生より、従来、一般教育課程と専門教育課程に二分されていた教育課程を改め、学生の関心、到達度に応じた主体的な学習を可能とするため、本学独自の新しい教育課程を導入している。新しい教育課程は、全学生必修の「共通科目」、各専門分野における研究の根幹となる「学科指定科目」、専門分野の枠組みを越え、学生各自の関心に基づいて選択する「自由科目」の3種類により構成される。

カリキュラム

共通科目

外国語科目 外国語を学ぶことは、学問の基礎となる論理的思考能力を養う上で大変重要である。また、外国語の文章を読むことは、その国の人々の思考様式や、その背景となる歴史と社会を理解することを意味する。これにより、国際感覚を身につけ、自国の文化への理解、さらには人間そのものへの理解を深めるための基礎が形成される。そうした意味から、第一外国語として英語を、第二外国語としてドイツ語・フランス語・中国語の中から一ヶ国語を必修としている。

総合科目 建学の精神に則り、自己の信念の確立をめざす「人間学」を全学生必修の総合科目として開講している。

「人間学Ⅰ」は、親鸞と釈尊の思想を理解することを通して、人間が人間として生きていくことの意義や価値を学ぶことをめざしている。ここでは「仏教と現代」をテーマに、浄土真宗を開いた親鸞という真摯な仏教者の思想的展開を、その基本となる釈尊の教えを踏まえつつ、現代の社会状況の中で総合的にたずねていく。また、苦悩の中に人生を問い、そこから人間を開放しようとした釈尊の伝記や基本思想に対する理解を深めながら、仏教の思想としての独自性や人間そのものを考えていく。最終的には、釈尊と親鸞の思想が現代社会にどう生かされるべきかを考察する。

「人間学Ⅱ」では、人間学Ⅰで学んだ釈尊と親鸞の思想を根本に、現代人を取り巻く問題につ

いて、さらに深く考察を進める。すなわち、人種の問題、地域社会の問題、生活環境の問題など、多種多様な問題を具体的に取り上げ、それらの問題が人間のいかなる営みによって生じたものか、その原因を探るとともに、多様な人間のあり方への理解を深めていく。この科目は、教養・専門の両方にわたって修得された広範な基礎知識を前提にし、それらを相関させ総合する科目として、2回生以上の学生に履修が義務づけられている。

学科指定科目（専門課程のカリキュラム）

専門課程は、段階的カリキュラムで構成され、1回生から始まる。ここでは、学科別の「専門基礎科目」が用意されており、この学習を通じて、学生が自らの関心や適性を見極め、2回生以降の専門分野を決定することとなる。

2回生時には、各学科内での専門分野を決定しなければならない。専門分野における本格的な研究の第一段階がここから始まる。ここでは、専門分野ごとの「専門基礎講読科目」が必修となり、同時にいくつかの専門科目を受講する。

3回生時からは、専門分野を中心とした研究が始まる。これまでに学んできたことや、より深く学びたいテーマなどを判断材料に、まず所属するゼミを選択しなければならない。以後、各ゼミの指導教員の厳しい指導のもと、それぞれの専門分野における研究を主体的に進めることとなる。

4回生時では、全学生に必修の「卒業論文」作成が中心となる。それまで学んだ偉大な先人の思想をもとに自分自身の視点を明らかにしながら、それを1つの理論体系として完成させてゆく。その作成過程においては、課題を見出し、課題解決への方法を学び、より深く総合的に考える能力を身につけることとなる。

本学の専門課程では、このように、基礎科目→基礎講読科目→ゼミ→卒業論文作成という段階的カリキュラムによって、専門分野における研究を完成させる。卒業論文という作品としてまとめることは、4年間の学習・研究の総仕上げであり、新しい自己を発見することでもある。

自由科目

自由科目は、先の共通科目・学科指定科目とともに、本学の教育課程の三つの柱の一つとしてある。共通科目・学科指定科目の二つの科目群の履修を基に、関心に応じて自由に履修できるよう6群の構成をとって開講している。教養的科目を配置したⅠ群、専門的関連科目を配置したⅡ群、語学科目を配置したⅢ群、情報処理関連科目を配置したⅣ群、スポーツ科目を配置したⅤ群、国際交流科目として短期の海外研修に参加するプログラムを配置したⅥ群、の区分的な科目配置を行っている。

自由科目には、卒業に必要な124単位の内46単位があてられ、数の上では58単位があてられる学科指定科目に匹敵する。このことは、幅広く教養を身につけたり、より高度で専門的テーマに重点を絞ったり、第2の専門分野を持つなど、学生が自らの意思により、能動的・主体的に学習計画をたて学ぶことを可能にしている。

【真宗学科】

親鸞が明らかにした仏教

純粹に人間のあり方を探究し、真に人間であることの完成をめざした仏教の中で、みずみずしい宗教的生命を息吹つつけているもの——それは親鸞が明らかにした仏教「浄土真宗」である。

古代から中世へ、既成の権威が崩壊し、新しい力が台頭する時代、「念仏者は無碍の一道なり」

と言いつつ親鸞は、独立自尊の自由な道を念仏道に発見し、それを完全に生きた仏者であり、すぐれた思想家であった。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という“悪人正機”の思想こそ、親鸞の鋭い人間凝視と、確かな人間信頼を見事に表現したものであるといえよう。

真宗学とは

真宗学科は、他大学には見られない大谷大学独自の存在であり、ここで学ぶ真宗学は本学における学問の基盤をなすものであるといつてよい。真宗学とは、親鸞によって明らかにされた真実の仏教としての「浄土真宗」を、一人ひとりが自らの生を通して学び、学的探究を行う学問である。従って、真宗学における学びは、常に自分自身が一人の人間として生きていることの根本の意味を問うことを通して行われる。それは「自己とは何か」、「人間はいかに生きるべきか」という人生の根本的問題を、自覚的に問おうとするものである。

総合的人間学を極める

親鸞は、自ら念仏者として生き、万人に本願念仏の教えを捧げると同時に、生涯をかけてその思想化と体系化を進めた。本学科では親鸞の主著『教行信証』をはじめ、親鸞の没後、門弟の一人である唯円がまとめた語録『歎異抄』など、多くの著作に、その求道的思索を学んでいく。親鸞の思想形成、浄土真宗の成立に重要な影響を与えた浄土教の諸経典や法然らの思想、さらに中国やインドの仏教思想、また、親鸞の思想を受け継いだ蓮如らの思想についても学ぶ。

「真宗学」には“学”の名が付けられているが、一般諸科学と同様の科学ではない。親鸞の思索がそうであったように、“聞思に始まる思索”であることが求められる。ここに、諸科学の根本であり、それらを総合する学問として、この学問がもつ大きな特質と意義がある。

講義では、『教行信証』『歎異抄』という2つの著作を中心に、親鸞の思想や「浄土真宗」という仏道の思想的背景やその内実について学んでいく。1回生時では、必修科目としての「真宗基礎学」や基礎的な講義・講読を、2回生時からは、専門的な学科指定科目を中心に履修する。3・4回生時の演習は、いずれも『歎異抄』を中心に学習を進める。親鸞の門弟である唯円の眼を通して、いわば彼とともに親鸞の思想を理解しようとするものである。

演習での研究討議は、専門教育の中心ともいふべきものであり、思想、社会、民衆など広い分野にわたり、その成果は卒業論文として結実していく。それは、学生が人格を形成していく上でも極めて大きな意義をもつ。卒業後には、大学院への進学の道を選ぶ者もあり、また宗教、国語、英語、社会の教員免許を取得して教職についたり、企業に就職して、そこで仏教精神を実践するなど、卒業生は広く社会に進出し活躍している。

他分野の学問や古今東西の思想を幅広く

真宗学を学ぶということは人間を学ぶことであり、学問の対象は真宗学や仏教学だけにとどまらない。哲学、宗教学、社会学、歴史学、文学。方法論やアプローチの仕方に違いがあるとはいえ、いずれも人やその集団、その営みについて考えるすぐれた学問である。真宗学科の学生は、こうした他分野の学問や古今東西の思想についても幅広く真摯に学ぶ。そうすることにより、真宗学を基礎とする総合的な人間学を身につけ、人生の基本問題について自問し得る、豊かな人格が形成される。

急激な技術革新、地球環境の危機、価値観の崩壊など、今日の人間を取り巻く環境は大きく揺れ動いている。そうした中で、まず基本となる人間そのものについて深く考え、ひいては自己の信念の確立を促すという本学科の果たすべき役割は、一層重要になっているといえよう。

【仏教学科】

文献研究から仏教の本質へ

西洋を中心とした科学的な合理主義が行き詰まりをみせる中、東洋思想、とりわけ仏教に対する関心が高まっている。また日本においても、人間のいのちの問題や精神的な豊かさをおざなりにする風潮がみられ、人間を根底から問い直す仏教の研究が、ますます重要な意味をもち始めている。

仏教研究を目的とした本学科は、仏教への誤った理解を是正するために、まず仏教の根本を見直すことから学び始める。研究の基本的な姿勢は、個人の問題を考えながら、社会的な問題に対して仏教の存在を問うことである。仏教は現代人に必要なものなのか。あるいは、現代社会にとって仏教はどんな意味をもっているのか、と問いかけていく。

本学科では、文献の研究を通して仏教の本質に迫ることを基本としている。アジアの広汎な諸地域にわたる仏教思想・仏教文化の解明をはじめ、インドの宗教・哲学をも含めた総合的な研究が行われている。

このため、1回生時から学科指定科目のうち、必修の「仏教基礎学」をはじめ、バラエティに富む専門的な講義に至るまで、自由に受講することができる。これらの諸科目を学ぶことにより、仏教学の基本的な知識を身につけ、研究分野の全体を見渡す確かな視野を養う。

個性豊かな仏教研究をめざして

2回生時から、仏教学とインド学に分かれ、より専門性の高いカリキュラムを受講する。また、仏教の基本文献を読む能力を集中的に養成するため、漢訳文献やサンスクリット語文献を読解するトレーニングが必修として課されることになる。ほかにパーリ語、チベット語などの古典語や、英語など、仏教研究に必要な語学教育にも配慮している。こうした語学とともに、仏教の教理や歴史についての講義や演習の科目を幅広く学ぶことができる。

3回生時では、各自が選んだゼミに入り、専門の研究に打ち込むことになる。インド・チベット・東南アジア・中国・日本にわたる仏教を、それぞれの地域ごとに展開してきた教理や歴史を専門的に研究するとともに、広くアジアの文化を視野に入れて研究するゼミとして、あわせて10クラスのゼミが開講されている。どのゼミも10名から20名の少人数にすることで、指導教授と学生が熱く討論しながら、仏教研究に打ちこめる体制をとっている。

4回生時になると、自分の研究の総仕上げとして3年間で身につけてきた専門知識を基に、「卒業論文」の作成のための研究にとりかかる。そのため、指導教授と個人的に相談しながら独自の研究プランを立て、個性豊かな研究成果を発表すべく力を尽くすこととなる。

仏教学分野

仏教学は、仏教に関する諸典籍に対する文献学を基本とした研究を通して、仏教を解明するとともに、アジアの極めて広い範囲に広まった仏教の展開を明らかにし、現代に生きる自己の問題として主体的に仏教の真意を問おうとするものである。インド仏教、南伝仏教、チベット仏教の研究のためにはサンスクリット語（梵語）、パーリ語、チベット語などの諸典籍があり、中国、日本の仏教研究のためには基礎的な典籍である漢文仏典があり、それらを基本資料として学習する。

インド学分野

本学のインド学は、仏教の周辺にあるインドの宗教や文化を研究課題としながら、東洋思想の

源泉といわれるインドの宗教、哲学などを探究しようとするものであり、仏教を広い視野からの確にとらえようとする学問である。また、ヒンディー語の授業も開講され、現代インドについての理解をめざしている。インドは過去から現在に至るまで、無限の文化遺産を受け継いでおり、そこに提示された問題は、人間にとって普遍的な課題として私たちに問いかける。

【哲学科】

人間存在の絶対的真理を探求

哲学とは何か。この問いに対する既成の答えは存在しない。その答えを探し求める姿勢それ自体が「哲学的探求」であろう。哲学を学ぶということは、人間存在の絶対的真理を探求し続けることである。真理を求めて何事かを自ら根本的・徹底的に考え抜き、同時に知を愛し求める自己の在り方を自覚することに、哲学の基本的な営みがある。哲学を学ぶ者は、そのような自覚的愛知の見地に立ちつつ、世界の原理や人間存在の根本的在り方を問い続けることが求められる。

東洋学を主体とする本学にあって、哲学科はとりわけ西洋思想の研究に携わる。その意味で、哲学科は東洋と西洋の相互媒介の役を果たしているといえよう。それは、東洋か西洋かの二者択一を迫ることもなければ、安易に両者の統一を唱えることでもない。本学科がめざすものは、東洋的視圏の中で西洋思想の位置づけを定義するとともに、西洋的合理性によって東洋的思考をふるいにかけるという広く世界的視野を獲得することである。

原書講読を通して哲学的思考を学ぶ

この学問的な問題意識に基づいて、西洋の哲学的伝統を究明し、人間にとっての善と信の意味を見極めるべく、本学科は西洋哲学、倫理学、宗教学の3分野によって構成されている。

学生はまず1回生時に、少人数クラスに分かれ、読書と討論を通して物事を哲学的に思考するための基礎的な力を身につける。2回生時ではそれぞれの関心に従って専門分野を選択し、主にその分野の基礎講読を受ける。さらに3回生時では各分野内においてゼミを選択し、担当教員の指導のもとでより専門的な学習と研究を続けながら、卒業論文の準備に取りかかる。

現在哲学科には7つのゼミがあり、学生は各自が自由に課題を決めて研究を続けているが、ゼミ学習において最も重点が置かれているのは、各教員が専門的に研究する哲学者の原書講読である。偉大な先哲の著作を、原文で精確かつ緻密に読み解いていくことは、単に一人の哲学者の思想の理解にとどまらず、批判的かつ根本的な哲学的思考の方法論を自ら学び、普遍的真理に照らして現実を洞察する力を得るための鍛練でもある。

西洋哲学分野

自覚的愛知としての哲学の発祥の地は古代ギリシャであった。その態度を正当に受け継ぎ、哲学の伝統を確立したのはヨーロッパである。古代ギリシャ以来、西洋哲学の展開こそ哲学の本流をなすものである。それ故、この分野では各自の選んだ哲学者の著作に即して西洋の哲学思想を学びつつ、哲学的思惟を養うことが目的となる。

教員たちもそれぞれ一哲学徒として、プラトン、カント、ヘーゲル、フッサール、ヤスパーズの研究をしながらゼミの指導に当たっているので、学生は講読や演習を通して哲学書の読み方を学びながら、良質な哲学的思考の骨格を身につけていくことになる。

倫理学分野

倫理学は哲学の一部門として「よく生きる」とはどういうことかを研究する。この問いに答えることは各人にゆだねられているが、倫理学はそれに普遍的な形を与えようとする試みといえ

る。西洋哲学がこの問いに対する合理的な答えの試みであるのに対して、倫理学ではもっぱら西洋の哲学者たちの探求を学びながら、人生論的な問いに向かう。

また、今日の倫理学の緊急課題である、たとえば安楽死、脳死と臓器移植といった生命倫理の問題も、講義や演習の中で積極的に採り上げられている。

宗教学分野

いかなる宗教も“生”の営みとしての、人間の基本的な様相を表現している。宗教学は、すべての宗教に普遍的な本質を求めて「宗教とは何か」と問う。この問いに、実証的あるいは内省的な哲学的解明を加え、人間にとっての宗教の意味を理論的に研究しようとするものである。

本学の宗教学は、その創設者鈴木大拙以来、仏教を中心に見すえ、神秘主義や神秘思想の研究の伝統を培い、豊富な文献を収集している点に特色がある。

宗教哲学の領域では古典的な宗教思想の研究を踏まえて「宗教とは何か」を問う立場に重点が置かれているが、宗教学の多様な領域に応じた研究指導もなされている。

【社会学科】

社会と人間について、互いに交差する2つの視点

人間は常に人間関係の内にあり、その関係が社会の成立を可能にしている。人間が社会的動物と呼ばれるのはそのゆえであるし、また、その姿こそが人間のあり方の根本的な形態である。他者の存在を前提することなしには個人を理解することはできない。ここに社会と人間について、2つの互いに交差する視点が導かれる。ひとつは、社会のあり方を知ること、人間の本質を把握すること。もうひとつは、人間の出生に始まる成長のプロセスの解明による社会的なるものの意味を発見することである。

本学の社会学科は社会学と教育学の2分野から構成される。現実社会の具体的な分析を対象とする社会学と、人間の学習過程を研究対象とする教育学は、いずれも社会的存在としての人間を見極め、人間のより高い発展をめざすという点で共通性をもつ。

学生は、まず1回生時において基礎科目として「社会科学研究法」を学ぶことによって社会学・教育学・社会科学の基礎的・入門的事項と研究方法を学習した後、2回生時で各人の関心に従って2分野のいずれかに所属し、それぞれの分野の基礎講読を受講する。3回生時以降はそれぞれの専門分野内で20～30名程度のゼミを選択し、担当教員の指導の下で4回生時に卒業論文を作成することになる。

社会学分野

社会学は一つの専門科学である。それが科学といえるためには、少なくとも明確な研究対象と研究方法をもたねばならない。社会学とは、われわれの日常生活の場となる「社会」およびそこにおける人間の「社会的関係」や「社会的行為」を研究対象とし、科学的方法によってそれにアプローチする学問である。

社会学は近代社会の自己認識の学として出発した。その後、それぞれの時代における社会の現実に対応して多様な展開を示すが、基本的には、人間の社会的行為、社会的関係、社会的集団の構造や機能の解明を目的とする。行為や関係や集団に関する一般理論を構築し、それを土台として、さらに個別の領域、たとえば家族、村落や都市の生活構造、宗教や文化、犯罪や非行等の社会病理、マス・コミュニケーション等々について、具体的な様相のもとに繰り広げられる普遍的な論理を考究する。社会学専攻者は基礎的な概念枠を習得し、それに基づいて現実の社会を分析

し、洞察する力を養うことが求められる。

本学の社会学分野のカリキュラムには、一般基礎理論と個別実証的研究とからなる狭義の社会学プロパーの科目、さらに世界の諸地域の民族とその文化・風土に関する理論と現実分析からなる文化人類学の科目が用意されている。本学では早くから文化人類学の可能性に着目してきた。風土、文化、言語などの面から幅広い考察を加えることは、現実社会についての、より深い現実把握を可能とさせる。

また、教員・学生をメンバーとして組織された「大谷大学社会学会」は、講演会や研究会、学外研修会などの活動を行っている。

教育学分野

教育について、人は誰でも一家言をもつ。教育を受けた経験があるからである。しかし、具体的諸問題に答えることはできても、その方法論が確立されていなければ「教育とは何か」「どのように教育すればよいか」という概括的な質問に答えることはできない。それゆえ、経験を対象化して記述し、そこに在る法則をとらえることが必要となる。教育学とはそれらの作業を可能にする学問である。

本学においては、教育学の理論的研究を主目的とし、あわせて教職に関する科目の研究にも携わる。その具体的な研究領域として、教育の理論と実践を研究する教育哲学および教育科学、教育に関する思想・実践・制度の足跡を研究する日本および欧米の教育史、教育課程の心理的側面を研究対象とする教育心理学、情緒的・人格的な成長を研究する臨床心理学、教育社会学、教育行財政、社会教育などがある。いずれにせよ、教育を「ヒトが人間になる」過程と言い換えてみるならば、あるべき人間の姿を探究することが、教育学にとって最重要事となる。

人間を育てるのは、家庭や学校教育に限らない。自然と自然を土台にして築きあげられてきた文明や文化の総体の中で、家族関係をはじめとする人間関係を通して、人間は教えられ、育てられ、人間となる。従って、教育学を学ぶ者に要請されるのは人間の営為と人間の生涯全体への目配りである。そして、教育が人間に対してもつ意味を探り、さらには、教育的行為を通して「人間とは何か」という問いに迫ることこそ、教育学が根底に置くものである。

さらに、教育学分野の教員・学生全体を構成員とする「大谷大学教育学会」が講演会やワークショップなどの活動を行い、理論的研究にとどまらず、具体的な考え方や学び方の研究にも取り組んでいる。

【史学科】

人間が新たな歴史を築くための指針

歴史学は、残された史料に基づく検証・考察によって、私たちがどこから来て、今どこに立ち、これからどこへ行こうとするかを問う学問である。その意味で、人間が新たな歴史を築くための指針を見出そうとする学である、といってもよい。

本学の史学科が、日本・東洋・仏教を3つの柱としているのは、我々の生きる世界としての日本、その舞台となった東アジア世界、それらの基本的なものの見方を創りあげてきた仏教—それらが我々の歴史を創りあげてきた、という考えに立脚しているからである。

3つの柱は、国史学・日本仏教史学・東洋史学・東洋仏教史学の4分野として構成されているが、それらは自立した領域と方法を持ちながら、一方で相互に重なり合い、補い合っ一つの体系をなしている。このことを前提としながら、授業形態としては日本史学・東洋史学としての統

合形態をもっている。

1 回生時では、史学研究法という学科共通の授業が、少人数の複数クラスに分かれて必修科目として課せられる。歴史学研究とは「人間の過去の営みを、今の視点から究明すること」であるとの目的や方法が教授される。

2 回生時では4分野に分属するが、事前の綿密な指導と、専門分野登録当日の面接相談によって決定される。この学年では、分野ごとの基礎講読が必修科目となる。この授業では、学生が担当して発表するゼミ形式で史料読解の基本が指導される。

3 回生時からのゼミでは、5～15人程度の人数で、4回生とともに問題解決学習が繰り返される。どのようにしてテーマを設定し、どのような史料を用い、研究論文をどのように利用するかなど、卒業論文を書き上げるための基礎が、このゼミを通じて身につけられる。こうして書かれた卒業論文は、学生個々の新しい歴史を創り出すこととなる。

国史学分野

古い伝統の中で国史学の名称が残されているが、日本史の研究教育の分野で、古代から現代に至るまでの日本史の全領域をカバーする。一見歴史を動かしたように見える権力者や英雄たちの日本史、政治史よりも、日々の生活の中で人間の問題を追及した普通の人々が歴史の主人公であったという視点を基本にすえている。そのような歴史の見方は、文化史・生活史・社会史・思想史を中心とした本学の日本史研究のあり方としての特色となっている。

さらにこのような日本史のとらえ方は、「東アジア世界の中での日本」という視座を生み、人々の生活・文化・ものの考え方などにおける東アジア的性格の解明という問題をなげかけている。また一方では日本の内の地域という問題にもつながる。こうして当分野においては、東アジア・地域・生活・文化などの現代の重要問題が、過去の歴史を通して問題にされている。

日本仏教史学分野

東アジア世界の人々の生き方を創りあげてきた仏教が、日本においてはどのように受容され変容されたか、またそのことが、日本の歴史にどのような意義をもったのか。日本仏教史学は、このような事柄を研究する分野である。

それは当然ながら、日本史の研究と不可分の関係にあり、その成果を常に吸収しつつ、日本仏教の歴史として再構築することが求められる。本学の学びの精神となっている親鸞・真宗の歴史、一向一揆などはもとより、奈良・平安の仏教や鎌倉新仏教各派の歴史が、人々の生活の視点から、そしてまた東アジアの視座から追求されている。

東洋史学分野

東洋史の対象は、広大なアジア全域を覆い、古代から現代までの約4000年という永きに及んでいる。この永くて広い時空間の中で、数多くの民族・国家が興亡を繰り返し、多種多様な文明が生まれた。このような民族・国家・文明が複雑にからみ合う歴史を的確にたどり、現代へのつながりを正しく理解しようとするのが東洋史学の目的である。このため、政治史や社会史、あるいは思想史や文化史などの視点が重視される。

本学の東洋史は、中国史を軸としながら、周辺の諸地域・諸民族の研究に、長い伝統を持っており、大きな特色となっている。本学図書館の東洋史関係の蔵書は、こうした研究の伝統から生まれた豊富な内容をもつものとして有名である。

東洋仏教史学分野

東アジア諸地域の人々の生活の基本にある仏教は、古代インドに興り、多様な経路を経て伝播

し、受容されたものである。その過程において時代や地域・民族などの特性によって、さまざまに変容され、個性が生まれた。このような仏教の歴史的研究を、その伝播に関わった人々や地域に則して解明する学問がこの分野である。

また中国における仏教史に重点を置きながら、周辺諸国の仏教をも視野に納め、またより広く政治・経済・文化・思想などの諸側面からのアプローチをも行っている。

【文学科】

作家・作品の本質を内側からとらえる

「文は人なり」といわれるように、文の学問である「文学」の研究は人間そのものの研究でもある。自然科学のように、研究対象を外側からとらえるのではなく、文学作品を深く厳密に読みこなすことにより、作者の内面にまで分け入り、作品の本質を内側からとらえようとする姿勢が必要とされる。それはまた、人間の深奥の世界に立ち入って、人間を理解しようとする欲求が要請されることでもある。従って、文学研究は人間と社会への深い理解力、洞察力を育てることになる。この点で、本学の伝統と環境は、文学研究にふさわしいものである。

国文学分野

日本文芸の本質と特性を究めようとする学問分野である。研究対象は、作品としての美的世界だけでなく、作品に描かれる人間のあり方や思想、さらには日本語の特質や美しさにまで及ぶ。当分野では、個々の作家や作品の研究をはじめとして、さまざまな分野との関連性を追究している。古典における仏教文学的見地からの研究、近代文学においては宗教との関連の研究に重点が置かれ、また、国語学としては、仏教語とその関連語の研究に重点が置かれている。

2回生時の国文学基礎講読で古典講読の基礎を学び、3回生時に、5つのゼミのいずれかを選択する。各ゼミとも、実証的な文献学の基本に立った演習を旨としており、教材としての資料を地道に収集し、資料の分析・検討を着実に行うことが求められる。

中国文学分野

悠久の歴史をもつ中国は、上古以来、文化や社会構造など、あらゆる面で、日本に深い影響を与え続けてきた。日本人にとっての中国文学は強い親近感を感じさせる、一種特別な外国文学であるといえよう。本学の中国文学は、文学のみならず、シノロジー（中国学）の概念のもと、思想・語学・哲学全般に及ぶ広汎な実証的研究を伝統としている。その研究は、質・量ともに充実した所蔵を誇る漢籍資料に、仏教や日本文学との関連研究を特色としつつ積極的に進められている。

2回生時においては、「中国文学基礎講読」他の講義により中国学各分野の基礎ならびに講読の素養を養う。3回生時からは本格的なゼミに参加し、指導教員のもとで各自のテーマについて研究を進める。

英文学分野

英文学の研究領域は、英・米文学ならびにアイルランド文学である。英文学は、その源流から、北欧系のアングロ・サクソン文化と、南欧的気質のケルト文化によって培われた民族的に多様な文学である。その多様性はアメリカ大陸においてさらに花開き、個と自然・社会との関わりをとらえるという新しい視角を生み出した。

本学における英文学の伝統は、大正年間に在籍した英文学者の第一人者、矢野峰人博士に始まる。現在も、アイルランドの詩人研究が矢野博士の流れを汲んで行われており、イギリス文学で

は基本的素養とされるシェイクスピア文学や19～20世紀における小説研究などが行われ、アメリカ現代文学とともに活発な研究が行われている。その方法は、テキストの徹底的な読み込みを通して、その文学的内容を把握するという一般的にも見えるものであるが、人間形成に資する文学教育の原理を踏まえて行われ、東西文学の接点として研究成果が期待されている。なお、語学力を高めるための設備・体勢も整っている。

ドイツ文学分野

ドイツの近代文学が世界文学へと飛躍したのは、ゲーテが活躍した古典主義・ロマン主義文学の時代(1770～1830)であるといわれる。そこに高らかに謳われたヒューマンイズムは、哲学史上のドイツ観念論と並び、フランス革命に匹敵するほどの精神革命であった。しかし、ニーチェに代表されるニヒリズムの現代は、両次世界大戦による破局を経て、ドイツに栄光と悲惨の矛盾をもたらした。その中で呻吟するドイツ文学は、我々から決して遠いものではない。この視点から開講科目も編成されている。

ドイツ文学を志向する学生は、まず共通・自由科目および基礎講読でドイツ語を徹底的にマスターする。講義科目では語学・文学史の一般知識、特殊テーマによる専門知識の習得を、講読科目では個別作家の作品を対象として文学鑑賞の眼を養う。演習科目では、近～現代の代表的作家の作品を対象として文学研究の方法を体得する。

【国際文化学科】

真の国際人を育てる

情報通信や交通輸送手段が発達した現代においては、地球の反対側で起きた出来事が、即座に自国の株価に影響を及ぼすなど、人間のさまざまな活動が国家の枠組みを超えて影響しあう。この影響は政治や経済の面において特に顕著であるが、今やあらゆる分野が国際化の波に洗われているといつてよい。

現代に生きる人間は、好むと好まざるとにかかわらず、誰もが国際的な関係の中に置かれて暮らしている。このような時代においては、ちょっとした利害対立や誤解が、武力紛争や民族間の摩擦にまで至ることも少なくない。異文化とそこから生まれる思考様式や行動パターンに対する正しい理解こそ、そうした紛争や摩擦を防ぎ、さらには交流による新しい価値を生み出すための重要な課題である。

国際文化学科は、こうした課題の実現を目的として設置された。いいかえれば、言葉や文化、肌の色や顔形の違う人々とも、言葉の壁を乗り越え交流できる人材を養成することが、本学科の役割である。言葉は大切だが、それに限定するのではなく、異質なものに対して自然に接することができ、どんな文化をもつ人とも虚心に付き合える姿勢を養うことこそ重要である。

幅広い比較文化的視点

それには、世界の多様な文化に関する最低限の知識が必要である。外国文学科が文学という限定された範囲を対象とするのに対して、本学科はある地域に関して、政治・経済・社会・地理・歴史・国民など、幅広い知識をもったゼネラリストを育てる。同時に、日本に関しても同様に知識を養い、双方の文化を比較しながら考えていこうとする。

この異文化理解という分野においても、本学の特質である人間を学ぼうとする基盤が欠かせない。なぜなら文化とは人間の精神活動が生み出したものであり、異文化との接触や交流とは、つまるところ異文化をもった人間同士の接触であり交流だからである。また、ヨーロッパ文化につ

いて学ぶためにはキリスト教に関する知識を欠かせないのと同様、日本文化も仏教的要素なしには語れない。豊富な資料をはじめ仏教関係の知識を学ぶ環境が整った本学は、諸文化との比較研究を行う上で、大きな強みをもっているといえよう。

音声言語教育と交流実体験に大きな力

本学科の学習は、地域文化研究・異文化交流・コミュニケーション（言語）の3本の柱からなる。

地域文化研究

わが国の国際文化研究は、従来ともすれば西洋文明を中心に行われることが多かった。しかし、本学科では東洋にも比重を置き、バランスの取れた地域文化研究を行っている。日本文化を考える時、まったく異質な英語文化などと比べると同時に、同じ漢字文化圏に属する中国文化・朝鮮文化とも比較することで、研究はいっそう重層的で総合的なものとなる。現在、本学科で研究の対象としている文化圏は西洋では英語文化圏、ドイツ語文化圏、フランス語文化圏、東洋では漢字文化圏と、インド、チベット、東南アジアの諸文化圏である。

異文化交流研究

地域化研究が特定の地域文化について学ぶものであるとするなら、異文化交流研究は異文化が出会い、交流するときに起こるさまざまな現象やその法則性などを学ぶものである。異文化との交流によって、ひとつの文化がどのように変化し発展していくのか、異文化をどのように受け入れるのかを、多様な歴史の事例から学ぶ。また、異文化交流の研究においては、自ら異文化との交流を体験することも重要な課題である。本学では、現在、中国の北京師範大学や東北師範大学、インドのジャワハルラルネルー大学、ネパールのトゥリプバン大学との交流プログラムを設置しており、直接東洋の異文化にふれる体験をする。西洋文化との交流では、イギリスのランカスター大学、アメリカのコルゲート大学との間にも同様の交流提携を結んでいるほか、ドイツ語圏、フランス語圏への研修旅行も実施している。

コミュニケーション（言語）

人間の精神活動や思考は言語を重要な手段としており、言語は文化の重要な一部をなしている。異文化言語を身につけることは、異文化を理解する方法を学ぶことであり、異文化研究そのものでもある。こうした意味から本学科では語学、とりわけ音声語、つまり会話に重点を置く。言葉はまず音声として形成されたものであり、また、交通が発達した現代社会にあって、現実の異文化交流は人と人が直接出会い、対話するという形をとることが多いからである。世界の多様な言語の中でも、事実上の世界共通語となっている英語については、専任教員以外に十数名のネイティブスピーカーを配置し、英会話や時事英語の科目を必須としている。ドイツ語、フランス語、朝鮮語、中国語などについても、1回生時から会話を中心にした語学教育に取り組んでいる。

(2) 大学院

文学研究科 修士課程（博士前期課程）・博士後期課程

真宗学専攻・仏教学専攻・哲学専攻・仏教文化専攻

本学には大学院文学研究科が設置されている。専門とするテーマの研究を通して、将来の研究者をめざす者として、また現代的課題に応じうる専門的職業人として必要な広範囲な能力の習得をめざす修士課程（博士前期課程）と、より専門的な学術研究を進めて、研究者として自立でき

る人材の育成を目的とする博士後期課程とがある。

それぞれの課程は、真宗学・仏教学・哲学・仏教文化の4専攻で構成されている。仏教を“学”として社会に開放するという本学の精神に立ち、仏教を核とした総合学をめざすところに本学の大学院の独自性がある。

大学院では研究活動が中心になるが、修士課程と博士後期課程との区別を明確にすることに努めている。修士課程は、学部で行っていた専門教育を基礎として本格的な専門研究を始めるという位置づけをもたせ、各自の関心に従って自由に研究を進める。それに対して、博士後期課程では、研究に創造的・普遍的な評価が得られることが求められ、学問領域における最先端の研究者の育成をめざしている。

それぞれの課程において、各自が期待される成果をあげるためには、演習・文献研究・講義において、自らが設定した研究テーマを追求しながら、普遍的な研究法を身につける必要がある。そのため本学では、指導教授陣の充実はもちろんのこと、さまざまなバックアップを行っている。

大学院のカリキュラムの特質は、「基礎科目」・「主要科目」・「関連科目」の3つの科目群により構成されていることにある。

「基礎科目」は、修士課程の各専攻ごとに、研究法や基礎的な概念の把握、テキスト・資料の読解力等、基礎学力を身につけるよう徹底的な訓練が行われる。また、基礎科目には、各専攻の枠を越えて「西洋文化研究」(文献研究)が開講され、英語・ドイツ語・フランス語による文献精読を通して、語学力の向上とともに、広く西洋の思考方法を修得することをめざしている。

「主要科目」は、各専攻ごとの主要な課題についての講義、テキスト・資料についての文献研究、研究発表・討論を中心とした演習が開講されている。また、「関連科目」は、4専攻共通で、他専攻の講義・文献研究が開講され、各自の関心により受講し、幅広い学的探究が可能となっている。

開かれた大学院をめざして

博士後期課程の大学院生は、文学部との共通の研究室に個人デスクをもって研究を行う一方、修士課程の大学院生や学部学生のよきアドバイザーとなる。また研究室には付属した書庫があり、研究がスムーズに行えるように配慮している。さらに研究室には分室があり、大学院生たちが共同討議できる場として活用されている。

博士後期課程における大学院生には積極的に各種学会での発表を促すとともに、研究論文を『大学院研究紀要』に発表し、広く成果を学会に公開させている。それらの中には学術的にも高い評価を受けているものも多い。

また、仏教研究をはじめとする本学の研究活動にふれるために、アジア諸国をはじめ欧米からの留学希望者も多く、こうした外国人留学生の受け入れも積極的に行っている。さらに生涯教育・リカレント教育に対応するために、修士課程の門戸を社会人に向けて広げていく計画である。

世界的レベルの研究者を招聘

大学院では仏教学をはじめ、人文科学、社会科学の学術研究の国際交流を図るため、1992年4月から世界各地で研究する第一線の学者を客員教授として本学に招き、特別セミナーを開講している。これは、本学大学院の研究のいっそうの高度化と、本学の伝統である仏教研究、人文・社会科学の蓄積と成果をもとに、国際学術交流の場を本学に開くことをめざすものである。

この特別セミナーは、他大学の大学院生や研究者にも開放されており、広く日本中から関係者

を集め、世界の一流学者の集中講義を受けることにより、研究者間の学術交流を深めている。

初回は1992年度から94年度までの3カ年で、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校のヘルマン・オームス博士、ミシガン大学のルイス・O・ゴメズ博士、ニュージーランド・カンタベリー大学のポール・ハリソン博士の3人を客員教授として招聘した。オームス博士は「徳川イデオロギー」を著し、第4回和辻哲郎文化賞を受賞、ハリソン博士は古代仏教研究で注目される研究者、ゴメズ博士は「浄土三部経」を英訳し、世界の仏教研究をリードする学者である。第2回目として、1995年度から97年度までの3カ年は、ドイツのマールブルク大学のマイケル・パイ博士、米国のテキサス大学のグレゴリー・ショーペン博士を客員教授として招聘し、それぞれ集中セミナーを実施している。

特別セミナーには、本学の教員が開講される年度当初または前年度より、開講テーマに基づいた文献研究を継続して行い、補佐としてセミナーの準備・指導にあたる。なお、本セミナーの受講修了者には、所要単位が認定される。

1995年度大学院特別セミナー客員教授

マイケル・パイ博士

1939年イングランド生まれ。ケンブリッジ大学に学び、リーズ大学において哲学博士の学位を取得。ランカスター大学教授などを経て、現在マールブルク大学の非ヨーロッパ圏言語文化学部教授。専攻は宗教学。また1985年より国際宗教学史学会の理事を務める。1995年度より3年間担当。1995年度より開講し、授業テーマは「宗教における伝統、革新、反省」。補佐には門脇健助教授と加来雄之専任講師があたる。門脇助教授は宗教学の研究者で主な論文に「劇としての『精神現象学』」がある。また加来専任講師は真宗学の研究者で主な論文に「内観の系譜」がある。

グレゴリー・ショーペン博士

1947年アメリカ生まれ。オーストラリアのキャンベラ大学において哲学博士の学位を取得。現在、アメリカのテキサス大学の宗教学部教授。専攻は仏教学。インド古代の碑文の解読、および律蔵の研究を通して大乘仏教の起源を解明しようとしている。1989年には Mac Arthur Fellowship を仏教学分野で初めて受賞した。1995年度より3年間担当。1996年度より開講。補佐には小谷信千代助教授があたる。小谷助教授はインド・チベット仏教の研究者で、主著に『大乘莊嚴經論の研究』『仏教瑜伽行思想の研究』がある。

【真宗学専攻】

親鸞の根本著作『教行信証』を解明

真宗学専攻は、親鸞によって明らかにされた真実の宗教「浄土真宗」を、親鸞の諸著作を通して、その根源から究明しようとするものである。すなわち、人間の真に帰すべき真実の宗教が切実に求められている今日、大乘仏教の至極として親鸞にうなずかれた「浄土真宗」の意義を自己自身の求道的探究心を通して、世界的な展望のもとで、学問的に攻究しようとするものである。また仏教の永い伝統、および現代の諸思想との関連の中で、世界史的な展望を持って「浄土真宗」の意義を広く深く明らかにしようとするものである。

本専攻では、人類思想史の偉大な成果としての親鸞の思想を、より深くより厳密に、より体系的に研究する。具体的には、親鸞の根本著作である『教行信証』の読解を中心にすえ、親鸞の信仰思想を体系的に解明していく。同時に、その思想背景としての原始浄土思想の研究、および浄土仏教の祖師の教学を学ぶ。特に七高祖とされる先人、インドの龍樹、天親、中国の曇鸞、道

緯、善導、日本の源信、法然などの思想研究、さらに近代における真宗理解についての研究を欠くことはできない。

国際的視点で親鸞思想を解明

大谷大学の学祖・清沢満之が生きたのは、鎖国から開国へ、近世から近代へと移り変わる時代であった。激動の時代という意味では、親鸞が生きた当時と通じるものがあり、その中で真宗思想がどのように理解されたかを問うことは、極めて意義深いといえる。現代における真宗理解を深めるためにも、近代における真宗理解の実相を探る。

さらに、三国にわたる七高祖の選定という事実からも理解される通り、浄土真宗は開かれた当初から国際的な視野をもっていた。この伝統からいっても、広く世界を展望する立場からの真宗思想の解明が、本専攻の基本姿勢のひとつである。学部での成果の上に立ち、さらに語学力の向上を図るとともに、西洋の文化や思想との関連の理解をも深める。

さらに深く真宗思想にアプローチ

具体的には、基礎科目の「真宗学基礎研究」（講義・文献研究）では、基礎的な概念の把握や、聖教読解の基礎学力を養うために徹底的な訓練が課せられる。また「西洋文化研究」では、各専攻の枠を越えて、英語・ドイツ語・フランス語による文献研究を通して語学力の向上を期するとともに、広く西洋の思考法を学び、感性を養うことを目的としている。

主要科目の「真宗学特殊研究」（講義）では、『教行信証』の主要な課題を取り上げて論議が展開され、また「真宗学特殊研究Ⅱ」（文献研究）では、テキストとして選定された聖教の綿密な読解力を養い、それを通して真宗思想を明らかにしようとするものである。「真宗学特殊研究Ⅲ」（演習）では、『教行信証』をテキストに、大学院生の研究発表を通して、真宗学の根本問題についての厳密な検討と考究がなされる。

また、関連科目では、すでに数多くの研究業績を世に公表し、長年にわたって研究指導にあたってきた教授陣が授業を担当する。「真宗学研究」の諸講義、文献研究をはじめ、「仏教学研究」「哲学研究」「宗教学研究」「仏教文化研究」「特別セミナー」など、広い範囲にわたる指導を行うものである。さらに、関連科目の中には、宗門の教学研鑽の場である安居が「文献研究」として開講されており、大学院生の積極的な参加が期待される。

大学院生個人の問題意識と関心を大切にしながら、真宗学研究の厳密な徹底性をめざし学問的訓練を行うため、意欲的な問題への取り組みと探究が要求される。

【仏教学専攻】

「学」としての仏教を追求

本学は、仏教を「学」として世界に開放するために設立された大学である。文学部の仏教学科は仏教を教養として学ぶことで豊かな人間性を育むところであるが、本専攻は仏教の研究者を育成する場であり、両者のめざすところは一線を画している。本専攻では仏教文献と真摯に向き合った研究をし、仏教がもつ現代的な課題との接点を見失わないよう努めている。

開学以来、日本における仏教学研究の先駆的役割を果たしてきたが、その間、世界の仏教学研究をリードする業績を次々と積み重ねて現在に至っている。

また、本学の仏教学研究の長い歴史の中で、本学とパリ国立図書館のみが所蔵する『北京版チベット大蔵経』をはじめ、4,500余点に及ぶチベット蔵外文献など、貴重な研究資料が豊富に収集され、整備されている。現在、インドのサンスクリット語文献はほとんど散逸しているが、チ

ベツト語訳の大蔵経はサンスクリット語原本からの直訳であり、仏教学研究には重要な意味をもっている。確かな伝統と業績に支えられ、本専攻では、さらなる学問的進展に向けて、仏教学研究の充実をめざしている。

本学における仏教学は、人間が真の人間となる道を求めて、仏教を学問的に研究することを通して仏教を学んでいく、という姿勢を大切にしている。それは人間喪失をもたらしている現代社会において、人間を根底から問い直す主体性を確立するために、仏教学研究が重要な役割をもつと確信しているからである。

諸典籍に対する文献学的研究

本専攻では、インド、東南アジア、チベット、中国、日本にわたる広い諸地域において、人類のために寄与してきた仏教の展開の思想的解明に関心を寄せている。このような思想的な仏教学研究の基礎は、諸典籍に対する文献学的研究であり、漢語、サンスクリット語、チベット語、パーリ語などの典籍に対するより高度な読解力を身につけることがぜひとも必要である。

そのために、基礎科目として「仏教学基礎研究」(講義・文献研究)を開講し、仏教における用語や基本的な概念を正しく理解できるように指導し、文献精読を通じて諸文献の読解力の向上と資料としての利用方法を学び、専門的な知識を修得することを目的にしている。さらに英語、ドイツ語、フランス語などの語学研究によって、語学力を修得するだけでなく、西洋の思考方法を学び、幅広い研究の視野を得ることをめざしている。主要科目の「仏教学特殊研究」(演習・文献研究)では、各自の研究分野に従って文献を専門的に研究していく。

なお、関連科目としては、仏教研究が国際的な規模で展開されている現状を、本専攻科目の上に具体化した、海外のすぐれた仏教研究者との共同作業による「特別セミナー」や、仏教研究にすぐれた業績をあげられた学識と卓見を備えた、本学の名誉教授、学界を担っている教授たちによる多様な講義が開講されている。そこでは、インド仏教、中国仏教、チベット仏教、さらには真宗学、インド哲学、西洋哲学、宗教学、仏教文化など、広範囲にわたった科目が網羅されている。

この質量ともに恵まれた学問的環境の中で、大学院生は、教授陣の指導のもとに、各自の研究課題に積極的に取り組むことができる。

また、本学では、大谷大学仏教学会が組織されており、年に数回、大学院生と教員による研究発表例会の開催や、学会誌『佛教學セミナー』を年2回刊行している。さらに、近年優れた研究成果を出した学外の先生を招いた講演会の開催、仏教学を専門的に研究しようとする留学生の受け入れも積極的に行い、本専攻の学術交流の推進を積極的に図っている。授業以外のこれらの機会を通して、大学院生のより高度な研究能力を開発することが可能となる。

【哲学専攻】

広義の哲学の立場から専門的な研究指導

本学は「浄土真宗の学場」であり、その学問の中心は真宗学にある。真宗学は明治以前にさかのぼる伝統に支えられているが、それだけに固定化し閉塞化しがちである。大谷大学はそのような真宗教学をたえず活性化するために建てられたともいえる。そしてその触媒となったのが近代仏教学であり、西洋哲学であった。本学は宗門大学として、自ら進んでまったく異質の伝統をもつ哲学を受け入れてきたのである。

それ故、本学の哲学研究は「神学の侍女」として哲学をとらえようとするのではなく、古代ギ

リシャ哲学以来の伝統——つまり知を愛し求めるという——“愛知”の伝統に忠実であることによって、他の学問領域に多大な刺激を与え続けている。

仏教を文字どおり国際化した鈴木大拙をはじめ、西田幾多郎、朝永三十郎、西谷啓治など、日本の学会に確かな地歩を占める京都学派の流れを汲む学者たちが、本専攻の歴史と学風を築いてきている。彼らによって形成されてきた本学の哲学の伝統は、一方でたえず宗教的なものに直面してきた。また他方で、西洋哲学の究明を通して、合理的認識の探究という自覚をますます深めてきている。

本専攻は、哲学・倫理学・宗教学・社会学・教育学の各分野を包括し、広義の哲学の立場から、専門的な研究指導がなされている。現実には、諸学の専門化が進み、総合的な哲学の立場はますます維持しがたくなっているともいえるが、逆にそれだからこそ、諸学の根幹としての哲学が求められるのである。

本専攻の大学院生が所属する第二研究室は、そのような構想に基づいて文学部の5分野を包括している。教員の研究テーマ、学生の研究課題は多様であるが、広義の哲学の立場から諸分野を総合して対応することを目的とし、各専門分野の研究指導が行われている。

自己のテーマの確立と探究

本専攻の大学院生は、基礎科目の「哲学基礎研究」(講義・文献研究)によって、哲学の根本的課題を明らかにする思索や、社会学研究のための基礎概念と方法を学び、文献の収集から読解の方法まで、研究活動に必要な知識や方法などを習得する。自己の関心をひくテーマが、研究史の上でどういう方法で扱われてきたかを学ぶことは、その後の独自の研究にとって必至である。

こうして研究の方法論や概念などを獲得した後、「西洋文化研究」により、英語、ドイツ語、フランス語で書かれた文献を精読する。自由に原書を読むことは、さまざまな文献に当たり、研究領域を広げることを意味する。この研究により、語学力向上と、西洋の思考方法の両方を学ぶこととなる。一方、主要科目における指導教授の演習や、関連科目の多様な講義、文献研究においては、個々人の問題意識と関心について、各分野の教員から随時指導を受けることができる。

哲学・倫理学・宗教学の分野では、プラトン、アリストテレスの古代ギリシャ哲学をはじめ、ドイツ観念論哲学、ケルケゴール、ニーチェなど、実存哲学のさきがけとなった哲学、さらに、ヤスパーズ、シェーラー、ガダマーなど、社会哲学、宗教哲学を包括する現代ドイツ哲学、さらにベルクソン、エリアーデなどの現代フランス思想の研究も進められている。また、鈴木大拙以来、神秘主義への関心が強く、宗教学・宗教思想関係の豊富な文献のなかでも、神秘主義関係の文献は充実している。

社会学では家族社会学・宗教社会学・文化人類学の研究が、教育学では日本の近代教育史をはじめ、西欧の教育思想の研究などが展開されている。

大学院の研究生活は研究室を中心とするが、第二研究室には哲学専攻の大学院生のためのコーナーが設けられ、研究室の活動の主体となることが期待されている。また、第二研究室所属の研究者を母体として、大谷大学哲学会が組織されている。この学会は、研究会や学術誌『哲学論集』などを通して、大学院生に研究成果を発表する場や機会が提供されている。

【仏教文化専攻】

史学・文学を成り立たせている人間の〈学〉

「仏教文化」とは、と問えば、答えは比較的容易であろうが、「仏教文化学」とは、という問

いに答えることはなかなか難しい。仏教文化の名を冠した研究所はあっても、その場合は、仏教の文化的側面を研究の対象とするということであって、ひとつの学の分野として、独自の方法と領域を確立してのことではない。

本専攻は、成立の経緯からいえば史学と文学の混成であったが、それを越えて、学としての自立を模索している。それは、研究領域において史学や文学と重なる仏教の文化的事象を対象としながら、方法的には史学と文学を根本的に成り立たせている人間の学の立場の回復をめざすというところにある。「仏教文化」が研究対象であるが、それを「仏教」「文化」「学」という方法によって、人間の学としての樹立を求めている。世紀末といわれるいま、この模索が重要な意義をもつことは言うまでもない。

とはいえ、研究対象の仏教文化そのものが時間的・空間的に極めて広大である。従ってその見定めも必要である。アジアの諸地域では仏教を土壌として、それぞれの民族が文化をかたちづけてきた。そしてこれらの研究対象は、日本と東洋の歴史学・仏教史学・文学として個別学的に追求された長い歴史をもっている。それらを、アジアの民族文化をとらえる学として再構築することこそ、本専攻がめざすところである。

独自研究をさらに探究

仏教文化がもつ課題を模索する一方で、これまでに行われてきた特色ある研究を深めることも大切である。近年、歴史学では東アジア世界像の究明という問題提起がなされているが、仏教文化の方法を深化させるために大きな手がかりになるに違いない。

本専攻の教員スタッフは史学関係と文学関係に分かれ、年代的には古代から中世・近世・近代までも網羅し、広範囲な研究に応えられる体制を整えている。それをささえる基盤として、仏教を中心に史学・文学に関する貴重な文献の蓄積があり、大学院生たちの多様な関心に応えることができる。本専攻では主に、次のような研究が行われている。

日本史・日本仏教史では、古代寺院史や仏教思想史、中世の社会史・思想史、鎌倉仏教史や真宗史、一向一揆、近世の民衆思想史などの研究が定評を得ている。

東洋史・東洋仏教史では、中国および周辺民族の社会制度史や政治史、あるいは宗教史・思想史が、六朝隋唐期から明代におよぶ中国史を中心に進められている。さらに、中国哲学や仏教と文学の関わりが、中国文学研究の主軸を形成している。かつて中国学・東洋学と呼ばれた伝統があり、それが新しいアジア学として再現することが課題になっている。

国文学では、日本の文学における仏教思想との関わりを中心的な研究課題とし、中世・近世文学研究において業績を積み重ねている。

文献の読解力や問題意識を重視

本専攻では、文献の読解力を鍛えることも重視している。中国の仏教文化に関わる文献を漢文で読む、あるいは日本における古典や漢字で編まれた文献を読むことで仏教文化の研究を進める。基礎科目の「仏教文化基礎研究」(講義・文献研究)では、仏教文化研究の方法論を個別かつ具体的に提示し、文献の読解力の養成と内容的確かな分析と把握に努め、考察する能力をそなえさせる。さらに「仏教文化特殊研究」(講義・文献研究)にも、その姿勢は受け継がれ、各分野の独自の研究方法による研究を深める。そして「仏教文化特殊研究」(演習)では、教授陣と大学院生との共同研究を基本方針として、仏教と文化の共通テーマのもと、各人の問題意識に沿って研究に取り組む。

また西洋の文化や宗教文化を学習することにより、仏教文化を異なった角度から照射して解析

するために、「西洋文化研究」を設けている。英語、ドイツ語、フランス語による文献精読によって、語学力の向上と西洋の思考方法を広く学び感性を養う。そのほか、大学院生による定例的研究発表会や学術論文の合評会なども自発的に行われている。

また関連科目として、仏教文化の国際学術交流を図るために、国際的に著名な学者を招き、特別セミナーを開講している。近年では、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校のヘルマン・オームス博士を招聘。氏の著書の院生による共同翻訳や特別講義などを実施した。

(3) 短期大学部

仏教科・文化学科・幼児教育科

豊かな人間性と教養を育む

短期大学部では、「自己の信念の確立」という明確な建学の理念をかかげ、2カ年という短い期間に充実した学生生活を送れるように配慮している。小クラス制のもとでそれぞれの学科の特色を生かし、仏教の学びをふまえて専門的な知識や技能の習得に努めることで豊かな感性を持った人間形成を行っている。

短期大学部には仏教科・文化学科・幼児教育科の3学科を設置している。仏教科は1950年に開設され、仏教を学ぶことを通して確かな人生観を身につけた信念ある人間の育成を願いとしている。幼児教育科は、1966年に開設され、仏教精神を根底とした深い人間観にもとづき、幼児の教育という重要な任務をはたすべき人材を育成することを目標としている。文化学科は1992年に、既成の国文科を充実、改組し、文化への多角的なアプローチによって、さまざまな文化の中での人間の営みを知り、文化と人間に対する感性をもった教養人を育成すべく開設された。

個性を育む教育体制

短期大学部では自由な個性を育てるために、学生の顔が見える教育体制を整えている。とくに、指導教員制をとることにより学生と個別に会話する機会を多くし、教員と学生が対話をしながら学び成長していけるようにしている。また一般研究室に助手を配置し、研究活動や学生生活の場におけるきめの細かな対応をしている。

さらに学習・研究を深めようとする学生には、文学部の3回生に編入する道も開かれており、毎年、大学文学部へ編入する学生も多い。教育は社会の要請によってかたちをかえるものだが、本学の教育が、人間形成・自己の信念の確立を基本にしていることを忘れてはならない。人間そのものを見つめ、考えられる人を育てるといふ、これまでの本学の伝統に即して新しい教育を展開していきたいと考える。

多様な関心に応えるカリキュラム

カリキュラムは、基本的な「共通科目」と専門の「学科指定科目」、学年や学科の枠を越えて自由に履修できる「自由科目」の3つに分かれる。

共通科目は、全学生が共通して履修する科目で、本学が願う人材育成のための教育科目の中で、もっとも基盤となる科目である。ここでは、「ブッダの生涯と私たちの人生」「〈仏教と人間〉について」という授業テーマが設定されている「仏教と人間Ⅰ」と「外国語科目」(英語)とが開設されている。学科指定科目は、学科ごとの専門的知識や技能の習得をめざしている。

自由科目は、従来的一般教育科目にあった人文、社会、自然という枠を取り払い、新しい視点から講義を再構成したものである。幅広い教養と専門教育に関連する分野にわたって、多様な科目を6群に区分して開講している。中でも1995年度より開設された国際交流科目では、海外研修

と学内講義とを組み合わせた科目を編成し、国際感覚を磨く機会を提供している。

このように新カリキュラムでは、必須科目は最低限に抑え、学生が自主的に学習の道筋を決められるようにしている。自分の関心や求めていることを問いながら、自己の個性を育ていくことを主眼に編成されたものである。

各学科で仏教教育を実施

本学のめざす仏教精神を基礎とした教育を行うために、それぞれの学科の専門分野においても、仏教に関する科目が配されている。たとえば仏教科には「真宗学Ⅰ」、文化学科には「人間と文化」、幼児教育科には「仏教保育演習Ⅰ・Ⅱ」が、必須科目として、開講されている。

卒業研究は2年間の集大成

短期大学部では2年間学んだ集大成として、学生各自が選んだ研究課題のもとで卒業研究のレポート提出が求められる。単なる知識学習の報告書ではなく、自らの問題について思考し、創造する作業を通して、実践的な能力を養うのがねらいである。

その研究の場として、小クラスの演習が実施される。レポートは全体発表会や指導教員の試問によって確かめられ、その成果は各学科の『紀要』にまとめられ毎年刊行される。

【仏教科】

人間性を問うこと

人は常に心の奥底で、自らの人間性を問い続けている。しかし、われわれを取り巻く現実には、自然で率直な心の働きを妨げる事柄も多く、望みの多くはかなえられず、満たされない思いだけが心に残る。とりわけ現代は、豊かな人間生活を得ようとして人類が営々として築き上げてきた物質文明に、かえって人間性をおびやかされつつあるとは言えないだろうか。満たされない心を慰め、生きているという実感を得ようとして、人はあらゆることを試みる。しかし、容易に根本的な解決には至らない。

人はまた、目の前に迫ってくる出来事に一つひとつ対処しなければならない。その際、自分の本心とは裏腹に行動していることが多くはないだろうか。それは、社会で価値があるとされていることに無意識に従っているからである。また人は、世間から見た成功と失敗に、一喜一憂しがちである。しかも、それが本当に心の奥底から望むことであるのかどうかということさえ問わなくなってしまっている。それでいて、たとえ成功したときでも、どこかに「本当にこれでいいのだろうか」という不安感を抱いている。それは、自らが人間であることを忘れ、自分が何者であるかを見失っていることではないのか。

仏陀・親鸞に学ぶ

仏教は日本文化の底流をなす精神的な伝統である。国際化が進むにつれ、日本人の多くは外国で何者かを問われることになろう。何者かということは、何をよりどころとして生きているかということである。これからはますます、仏教という精神的伝統を学ぶことが大きな意味をもつことであろう。

仏教科では、人間という存在を根本から見極めた仏陀と親鸞の教説を学ぶことを通して、目先の利害や世間の価値観にとらわれることなく、自らを純粹に見つめ直す態度を養うことを第1の目的としている。すなわち、単に解答を求める学習をするのではなく、人が生きる意味を本質から問う、その学びの場として本学科は開かれている。

文化や思想についての知識を広く身につけるといふ、人間探究のための基礎的な学びを経て、

真の意味で自立した、自己に誠実な人格を世に送り出そうとしているのである。

小クラス制・研究室

本学科では、学生と教員との豊かな心のふれ合いを重視し、小クラス制をとっている。また、学びの場は教室だけとは限らない。たとえば、比叡山に親鸞の足跡をたどり、宗教的雰囲気の中で講義が行われる試みがなされている。また、仏教科研究室には基本的な学習図書が配置され、学びを深めるための文献にこと欠かない。さらに、そこから新たなふれ合いが生まれることもある。一人ひとりが思いのままに学習に励むとともに、学生と教員、学生同士が相互になごやかに語り合う場となっている。

さらに、年に一度恒例の一夜研修会では、学外に会場を設け、約20名の教員ともどもに泊まりこみ、夜を徹して身近な問題について語り尽くされる。また、年に数回学生により「短仏通信」という新聞が発行され、学生一人ひとりの声が、仏教科という出会いの場に響くよう配慮されている。

研究課題への取り組み

仏教科は2年間という短い期間において、学びの成果を一つの完成した形にすることをめざす。このため、2回生時の後半に、各自の研究課題に取り組み、卒業研究レポートとしてその成果をまとめることが要求される。ここでは、即席的な答えを用意するのではなく、それぞれの問いをじっくり考えることに重点を置いている。このレポートは2年間の学びの集大成であり、その成果の概要は、毎年刊行している『仏教研究紀要』に掲載される。

卒業研究レポートの作成は、複数の教員の指導のもとに行われる。このようなきめ細かい配慮は、これを書くことによって学生たちが大きく成長することを願ったものである。

また、本学科では、教える者と学ぶ者との隔たりをできる限り縮めていくことをめざしたいという願いのもと、共に学び合う雰囲気を大切にしている。そして、人間とは何か、自己とは何かという問い続けることを理想としているのである。

【文化学科】

「文化」という概念に迫る3つの視座

本学科では、人間の「文化」という、極めて広汎な概念について、文芸文化・文化史・国際文化と3つの視座からアプローチする。文化にふれ、親しみ、考察を加えることによって、さまざまな文化の中の人間の営みを知ることを目的としている。また、本学科がめざしているのは、現代の社会と文化と人間に対する深い感性を培い、今後の社会に求められる真の教養人の育成である。特に仏教精神に基づく総合的な人間学を機軸に、文化への多角的なアプローチを行うことによって、人間の本質そのものを問い、真の人間性の回復をめざしている。

2回生時には全員が卒業研究論文を制作し、毎年出版する「文化学科紀要」に掲載するため、学生各自に主体的な学習姿勢が求められる。そのテーマは、学生各自の個性と関心に基づき、自由な選択が認められている。これに対する指導方針も、学生の自由で自発的な学習意欲を狭い枠組みに閉じ込めようとせず、柔軟な対応を旨とする。

文芸文化

日本文学を基調として、東洋・西洋の多様な文芸作品を読み解くための基本的な能力を身につけ、文芸作品を成り立たせている言語について広く学ぶための講座が開設されている。その中でも、作品演習や言語表現に関する基礎理論を徹底的に学ぶための独自の指導体制が組まれている

ことが、本履修コースの特徴である。

これによって、世界の言語文化について幅広く理解し、すぐれた文学作品を深く味わうことのできる芸術的感覚を磨き、さらには、人間の存在そのものに対する洞察力を深めることをめざし、美しく正しい日本語を身につけた、真の教養人を育成し、世に送り出そうとするものである。

文化史

文化史とは歴史学の一分野であり、本履修コースは歴史を主軸に置いている点に特徴がある。古来、日本人が描いていた世界観であり、仏教伝来ルートでもあるインド・中国・朝鮮・日本などを研究の対象とする。ここでは、各地域の文化形成に大きな役割を果たした仏教を深く探究する本学の特色が十分に生かされる。

また、教材としては、文献のみにとどまらず、人々の生活に根ざした歴史文化資料を重視するというのが本学科の特色である。これは、文字を駆使した民族だけでなく、文字を持たなかった民族にも文化があり、そこにこそ人間本来の営みが表れているという認識によるものである。

衣・食・住をはじめ、さまざまな習俗など、幅広い人間の生活文化史から学び、考える力を養う。これにより、21世紀に向けて要望されている生涯学習のリーダーとしての教養人の育成をめざすものである。

国際文化

本履修コースでは、世界のさまざまな地域の言語・文化・人間を研究対象とし、異文化への理解を深める中で、国際的感覚を身につけていく。ここでいう“国際”とは、単に外国や異文化圏のことではなく、複数の国や地域文化が接するところ、あるいはその比較という概念である。日本の文化を基盤に置きながら、西洋・東洋の多様な文化を学び、異文化と日本文化との比較研究をも行う。

本コースが対象としているのは、アジアではインド圏、中国語圏、欧米では英米語圏、ドイツ語圏、フランス語圏である。これらの地域の言語を含め、文化や人間など多様な面からアプローチし、異文化に対する理解を深めると同時に、日本文化を省みるための国際的な視点を身につけ、深い洞察力を養う。

これにより、世界の文化圏への理解を深め、あらゆる人々と手をたずさえ、真にグローバルな社会を築いていくことのできる、国際的パートナーシップのある豊かな人間性の育成をめざしている。

【幼児教育科】

幼児への真の人間教育

人間はあまりに未熟に生まれるがゆえに、人格を形成するための基礎となる乳幼児期は、人生の中でも最も重要な時期である。幼年期もまた、人との関わりによって豊かな人間性を身につけるべき時期であり、大切に守られねばならない。しかし、現代社会の複雑に錯綜したあり方や、機械・情報文明の加速度的な進展は、いつしか人間を疎外し、幼い子が人として成長する過程をさえ歪めている。

この激動する現代において人間が復権することは、明日の社会を担う世代への期待を抱かせる。この期待を満たそうとすれば、幼児への真の人間教育が最も重要な課題となるであろう。

人間の未来を確かなものとするため、本学科では、学生一人ひとりが仏教の精神に基づいた保

育観を確立することをめざしている。人間が真にあるべき姿を探究し、保育者としての自己を実現することを通して、「共に生き、共に育つ」を教育理念に、子どもや社会に対して謙虚に接していくことができることを願いとしているのである。

保育者としての資格取得

幼児の保育は責任ある仕事である。これに立ち向かい、やり遂げることのできる自己を確立するためには、あるべき幼児教育について根本的に追究し、学問的知識を習得するとともに、実際の保育活動を自信をもって行い得るだけの専門技術を身につけることが必要である。

本学科では、幼稚園教諭、保育所・施設の保母および男性保育者資格が取得できる。それらは型にはまった保育技術者の養成をめざすものではなく、創造的な保育観に裏付けられた信念をもち、新しい時代に適合した、活発で積極的な幼児の理解者の育成をめざしている。

専門教育課程

幼児を真に理解できる保育者を養成するという目的のもと、その教育課程は、理論の理解を主眼とする講義科目から、基礎的技術の習熟をめざす実技演習に至るまで、多種広汎に展開される。具体的には、保育および子どもについての理論的考察を深める分野としての保育原理・幼児教育学・家庭教育・児童文化・児童心理・児童福祉や、保育に関わる基礎的技術を育て、感性を磨く分野としての音楽・図画工作・体育、そして、小児栄養・小児保健の実習などの科目。さらには、さまざまな領域にわたる保育内容の研究などがある。各教科科目を統合するものとしては、実際の保育を現場で体験する教育実習・保育実習、そして仏教保育演習などが開講されている。

仏教保育演習

仏教保育演習は、多彩な専門教育を通じて習得した理論的知識や技能が、仏教精神を柱として各人のうちに有機的に総合され、結実することをめざして設けられている。専門教育は専門家の育成をめざすものではあるが、専門分化はともすれば、総体的存在である人間をいくつもの要素に分割してしまい、分裂した人間把握しかできずに終わってしまう恐れがある。子どもの総体を受けとめることのできる保育観を確立する必要があり、その契機として仏教保育演習がある。この演習は、大学の内外に場を求め、見学、研修会、講演会、卒業研究指導などとも連携して、多様な形態と内容をもって実施される。

卒業研究レポート

2年間にわたる理論・実践学習の成果を確認し、総仕上げを行うことを目的として、全員に卒業研究レポートの提出を課している。いくつかの専門コースの中から各自がひとつを選択し、各々が設定した研究課題について、少人数グループでの指導が行われる。受け身の学習とは異なる厳しさがあるが、自らが主体となって研究する態度と方法を習得し、独自の理論探究を試み、実践における有効性を知る絶好の機会でもある。

提出レポートは、その一部が全体発表会で報告され、すべてのレポートの要旨が各年度の『卒業研究』にまとめられ、毎年度末に刊行されている。

(4) 学会の組織

学内における学会活動は、教員・学生を中心に運営され、大学の教育・研究機能の根幹を形成している。本学における学会の構成は、大学全体を包括し、学術研究に関する事業を行う大谷学会と、専門分野及び専門分野の枠を越えて活動する諸学会とに分けられる。各学会とも、教職員・学生が加入し、研究会、研究発表会、講演会、学術誌の発行など積極的な活動を行っている。

大谷学会

本学の教職員と文学部、大学院、短期大学部の全学生が加入し、本学における学術研究の中心機関として運営されている。また、研究成果をひろく公開するために、学術誌として季刊の『大谷学報』、年刊の『大谷大学研究年報』を毎年発行し、春に大谷学会公開講演会を、秋に大谷学会研究発表会を開催している。

『大谷学報』は、大正9年に創刊された『仏教研究』を、昭和3年に改題したもので、現在通巻287号におよんでいる。また、『大谷大学研究年報』は、昭和17年に創刊されて以来、第48集を発行するに至っている。

その他の諸学会

各学科、専攻、専門分野ごと、あるいは、専門領域を越えて組織されている学会で、教員、学生が一体となり、研究会、例会、調査、史蹟踏査、一夜研修会、公開講演会など、多彩な活動を行っている。また、学術誌として『親鸞教学』『佛教学セミナー』『哲学論集』『宗教学会報』『尋源』『文藝論叢』『英文学会会報』『西洋文学研究』などが刊行されている。

学会

大谷学会			
真宗学会	日本仏教史学会	仏教学会	東洋史学会
哲学会 東洋	仏教史学会	西洋哲学会	文藝学会
倫理学会	国文学会	宗教学会	中国文学会
社会学会	西洋文学研究会	教育学会	英文学会
国史学会	独文学会		

学術誌

『大谷学報』	大谷学会	『大谷大学研究年報』	大谷学会
『親鸞教学』	真宗学会	『佛教学セミナー』	仏教学会
『哲学論集』	哲学会	『宗教学会報』	宗教学会
『尋源』	国史学会	『文藝論叢』	文藝学会
『西洋文学研究』	西洋文学研究会	『英文学会会報』	英文学会

(5) 学位

本学において授与する学位は、博士、修士及び学士である。

博士の学位は、その専攻分野について研究者として独創的研究活動を行うに必要な高度で精深な研究能力とその基礎となる幅広い豊かな学識を有する者に授与するものであり、本学大学院博士後期課程修了の認定を得た者、又は、本学に博士の学位論文を提出してその審査に合格し、かつ、専攻分野に関し本学大学院の博士後期課程を修了したものと同等以上の学力を有することが、試問によって確認された者に授与している。授与者の一覧と、他大学において取得した者の一覧は以下のとおりである。

同様に、修士の学位は、本学大学院修士課程を修了した者、学士の学位は、本学文学部を卒業した者に授与している。修士学位授与者の人数のみ以下にあげる。

学位（博士）

年度	氏名	所属機関	報告番号	学位の種類	課程・論文	授与年月日	専攻	博士論文名
1991 (平成3) 年度	幡谷 明	大谷大学	乙第27号	博士 (文学)	論文	1992年 1月28日	真宗学	「浄土教における菩薩道の研究」 参考論文「浄土論註上下二巻対照表」
	名畑 崇	大谷大学	乙第28号	博士 (文学)	論文	1992年 1月28日	仏教文化	『元亨釋書』の研究 副論文『元亨釋書』索引
1992 (平成4) 年度	大桑 斉	大谷大学	乙第29号	博士 (文学)	論文	1992年 4月7日	仏教文化	『近世初期民衆思想史研究』 副論文『日本近世の思想と仏教』
1993 (平成5) 年度	福島 光哉	大谷大学	乙第30号	博士 (文学)	論文	1994年 3月29日	仏教学	『宋代天台浄土教の研究』 論文註『宋代天台浄土教の研究』
1995 (平成7) 年度	大河内了義	大谷大学	乙第31号	博士 (文学)	論文	1995年 5月16日	哲学	“Wie man wird, was man ist —Gedanken zu Nietzsche aus ö stlicher Sicht—”

学位（博士）取得者

年度	氏名	授与大学	学位の種類	課程・論文	授与年月日	博士論文名
1992 (平成4) 年度	関口 敏美	奈良女子大学	博士(学術)	論文	1992年 4月23日	柳田國男における「学問」の展開と教育観の形成
1993 (平成5) 年度	Robert Franklin Rhodes	Harvard University	Doctor of Philosophy	論文	1993年 5月23日	Genshin and the <i>Ichijō yōketsu</i> : A Treatise on Universal Buddhahood in Heian Japan
1995 (平成7) 年度	多田 稔	Saint Olaf College	Doctor of Humane Letters		1995年 9月27日	

修士学位取得人数

専攻	1991(H3)年度	1992(H4)年度	1993(H5)年度	1994(H6)年度	1995(H7)年度
真宗学	9人	14人	12人	17人	12人
仏教学	3人	9人	6人	12人	12人
哲学	3人	3人	1人	4人	8人
仏教文化	6人	6人	12人	8人	6人
合計	21人	32人	31人	41人	38人

(6) 研究成果の公開

本学では、年度毎に学術刊行物の出版に対する助成を行っている。助成の対象は、本学の専任教員の個人研究又は共同研究による刊行物とし、年間3件以内とする。助成に該当する刊行物は、学術研究の成果として、その価値を認められるものであることを要し、助成に関することを審議するために、学術刊行物出版助成審査委員会を置いている。助成額は、出版経費見積額の2分の1（1万円未満切り捨て）とし、その上限は100万円である。

学術刊行物出版助成

年 度	氏 名	出 版 物	出 版 社	発 行 日	助成額
1993(平成5)年度	佐々木令信 (助教授)	『中右記人名索引』上巻・下巻	臨川書店	1993(平成5)年度 11月25日	30万円
	水野 有庸 (教 授)	『古典ラテン詩の精髓 —本邦からのラテン語叙情詩集—』	近代文藝社	1994(平成6)年度 3月10日	65万円

(7) 科学研究費による研究

科学研究費補助金は国が学術を振興するために研究費を助成するものであるが、科学研究費補助金全体の採択率の平均(H3～H7年度)は約35%である。本学の採択率は30%を切っていて、決して高い数字とはいえないが、文学部の大学としては実績を積んでいるといえる。研究種目は、申請・採択とも一般研究・奨励研究がほとんどである。

「文部省科学研究費補助金」採択

年 度	所 属	研究代 表者名	区分	期間	開始 年度	終了 年度	研究種目	研 究 題 目	当該年度 補助金額	累 計 補 助 金 額
1991 (平成3) 年度	文学部	白館戒雲	継続	2年	平成 2年度	平成 3年度	一般研究(C)	『菩提道次第論』(ラムソムチェンモ)の文献学的研究	600,000	1,700,000
	文学部	兵藤一夫	新規	2年	平成 3年度	平成 4年度	一般研究(C)	『現観荘嚴論』の複注 “rNam bshad snying po rgyan”の翻訳研究	1,200,000	1,700,000
	短期 大学部	中森一郎	継続	3年	平成 2年度	平成 4年度	一般研究(C)	日本法相宗統流に関する研究 —神統流の伝承過程を中心として—	700,000	1,900,000
1992 (平成4) 年度	文学部	兵藤一夫	継続	2年	平成 3年度	平成 4年度	一般研究(C)	『現観荘嚴論』の複注 “rNam bshad snying po rgyan”の翻訳研究	500,000	1,700,000
	文学部	桂華淳祥	新規	2年	平成 4年度	平成 5年度	一般研究(C) 萌芽的研究	明清時代における宗教 と地域社会	900,000	1,200,000
	短期 大学部	中森一郎	継続	3年	平成 2年度	平成 4年度	一般研究(C)	日本法相宗統流に関する研究 —神統流の伝承過程を中心として—	300,000	1,900,000
1993 (平成5) 年度	文学部	桂華淳祥	継続	2年	平成 4年度	平成 5年度	一般研究(C) 萌芽的研究	明清時代における宗教 と地域社会	300,000	1,200,000
	文学部	吉元信行	新規	2年	平成 5年度	平成 6年度	一般研究(C)	パーリ語注釈文献綱要 Sārasaṅgahaのデータ ベース構築と思想的研 究	1,000,000	1,500,000
1994 (平成6) 年度	文学部	吉元信行	継続	2年	平成 5年度	平成 6年度	一般研究(C)	パーリ語注釈文献綱要 Sārasaṅgahaのデータ ベース構築と思想的研 究	500,000	1,500,000
	短期 大学部	関口敏美	新規	1年	平成 6年度	平成 6年度	奨励研究(A)	柳田國男の女性生活史 を中心とした近代日本 における女性の主体形 成に関する実証的研究 —とくに1930年代を中 心に—	900,000	900,000

1995 (平成7) 年度	文学部	小川一乗	新規	3年	平成 7年度	平成 9年度	一般研究(B)	大谷大学所蔵チベット 語文献の電子データ化	2,800,000	6,000,000
	文学部	白館戒雲	新規	3年	平成 7年度	平成 9年度	一般研究(B)	ツォンカパにおける中 観哲学の研究	2,700,000	4,800,000
	文学部	織田顕祐	新規	3年	平成 7年度	平成 9年度	一般研究(C)	曇無讖の研究	900,000	1,700,000
	短期 大学部	宮崎健司	新規	1年	平成 7年度	平成 7年度	奨励研究(A)	正倉院文書より見た古 代仏教に関する研究	900,000	900,000

(8) 在外研究

本学における教育・研究の発展充実を図るために、専任教員が国内外において調査研究を行う制度として、本学では在外研究員助成制度を設けている。その在外研究は、調査研究の種類により指定留学、助成留学に区別され、それぞれ長期（6カ月以上1年以内）、短期（3カ月以上6カ月未満）の期間が設けられている。

在外研究

年度	氏名	期間	研究機関		研究テーマ
1991 (平成3) 年度	Waddell, Norman Alan	1991. 4. 1～1991. 9. 30	カンザス州立大学	アメリカ	現代アメリカ詩論
1993 (平成5) 年度	須藤訓任	1993. 4. 1～1994. 3. 31	アウクスブルク大学	ドイツ	ドイツ近代思想の形成 と発展
1994 (平成6) 年度	須藤訓任	1994. 4. 1～1994. 8. 31	アウクスブルク大学	ドイツ	ドイツ近代思想の形成 と発展
	築山修道	1994. 4. 1～1995. 3. 31	ケンブリッジ大学 ノッティンガム大学	イギリス イギリス	コミュニケーションを 中心とした英語教育法 の研究と英国文化理解
1995 (平成7) 年度	大西正倫	1995. 4. 1～1995. 9. 30	京都大学	日本	1. 木村素衛の教育哲 学の研究 2. 「臨床保育学」の 基礎づけ

3. 特別研修員制度

1982（昭和57）年、博綜館新築に合わせ4群6層の新構想研究室体制が発足すると同時に、大谷大学においては従来の助手制度を廃し、新たに特別研修員制度をおいた。助手制度の廃止は、多年の研究室体制に起因するいくつかの弊害が指摘されてきたことと、新たな構想に基づく研究室体制の実現が望まれたことなどによる。

特別研修員は、「原則として研究室に常駐し、研究計画に基づき専門的研究に従事するとともに、研究室主任を補佐し、学術研究及び教育に関する諸活動の推進をはかる」ものと位置づけられ、研究室の運営に携わる側面と同時に、次世代を担う研究者の人材発掘の側面とを持つものとして制度が設けられたのである。

特別研修員は、広く人材発掘の間口を広げることを目的として、学内・学外を問わず公募して採用される。公募に当たっては、大学院修士課程修了またはこれと同等以上の学力を有するもの

を基礎資格とするが、主として博士後期課程の満期退学者を中心に人選され、教授会の議を経て学長が採用を決定する。特別研修員には、応募に際し履歴書・成績証明書などに加え、現在までの研究の梗概、今後の研究計画の提出を求めており、研究者として自立しうる学力の確認が重視される。選考に際しては、書類審査及び面接が課されることとなっている。

特別研修員には、日常における個人の研究活動に加え、本学教員との学術的交流や、大学院生など若手研究者との研究会の主宰活動や交流などを通じて研究の内容を深化し、研究の方法や視点の拡大をはかることが期待されているのである。特別研修員の制度は、特別研修員としての個人の制度でもあり、同時に、大谷大学全体の中での研究活動充実化のための一方途であるとも言えるのであり、その意味は重いと言うべきであろう。

これら特別研修員の研究活動の成果は、毎年度末学長に報告書として提出し、同時に毎年度末の研究報告会における発表を義務づけている。

なお、特別研修員は文学部各研究室それぞれに数名が置かれ、任期は2年、月額190,000円の手当が支給されることとなっている。

以下、近年における特別研修員の採用状況を明示する。

特別研修員一覧（1991～1995年度）

1991（平成3）年度

氏名	所属研究室	専攻分野	研究テーマ	最終学歴
柏倉 明裕	第一研究室	仏教学	四明知礼の浄土教—仏身観を中心にして—	H 2. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
木越 康	第一研究室	真宗学	真宗教団論—安田理深における教団論の展開を中心として—	H 2. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
福田 琢	第一研究室	仏教学	後期有部における心と煩惱	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
藤原 正寿	第一研究室	真宗学	近代真宗教学の意義—清沢満之における社会的実践を基軸として—	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
茨田 通俊	第一研究室	インド学	バラモンの諸相	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
村上 宗博	第一研究室	真宗学	存覚の法華問答	H 2. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
判田 哲也	第二研究室	西洋哲学	フィヒテの存在論—知の彼岸としての絶対者—	H 2. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
松井 吉康	第二研究室	宗教学	エックハルトにおける「永遠の存在」を巡って—存在へのモラルを求めて—	H 2. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
本林 靖久	第二研究室	社会学	地域社会と真宗—墓を持たない門徒の民俗世界をめぐって—	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
杉本 理	第三研究室	日本仏教史学	院政期貴族社会と日記—『中右記』 薨卒伝を中心に—	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
前田 一郎	第三研究室	日本近世史学	慶長期徳川政権の寺社行政について	H 2. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
宮本 則之	第三研究室	中国社会史学	元代江南社会と処士	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
伊藤 淳子	第四研究室	英文学	シェイクスピアの歴史劇『ヘンリー五世』について	H 3. 3 京都大学大学院修士課程修了

大橋 靖	第四研究室	中国文学	黄山谷と茶	H 2. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
土門 政和	第四研究室	国文学	『とはずがたり』と『撰集抄』	H 1. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学

1992（平成4）年度

氏名	所属研究室	専攻分野	研究テーマ	最終学歴
大窪 康充	第一研究室	仏教学	廬山慧遠の見仏	H 4. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
福田 琢	第一研究室	仏教学	彼同分について	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
藤原 正寿	第一研究室	真宗学	近代真宗教学の意義	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
茨田 通俊	第一研究室	インド学	原始仏典における無記説について	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
伊藤 暢彦	第二研究室	教育学	「ゲマインシャフト」に立脚した教育—Peter Petersen ~ Heinrich Döpp-Vorwaldの系譜において—	H 4. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
大橋 洋	第二研究室	哲学	初期ニーチェにおける認識の問題	H 4. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
本林 靖久	第二研究室	社会学	日本の葬送儀礼の比較研究	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
杉本 理	第三研究室	仏教文化	院政期の貴族社会と仏教—院政と最勝講—	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
宮本 則之	第三研究室	中国社会学史学	元代饒州のエリートと社会	H 3. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
吉井 克信	第三研究室	日本仏教史学	大坂本願寺における所在地名の一考察—「大坂」表現から「石山」表現へ—	H 4. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
伊藤 淳子	第四研究室	英文学	『ジュリアス・シーザー』について	H 3. 3 京都大学大学院修士課程修了
今場 正美	第四研究室	中国文学	『文心雕龍』の作家論—三曹と建安の七子—	S61. 3 立命館大学大学院博士後期課程満期退学
土門 政和	第四研究室	国文学	『とはずがたり』における「定業亦能転」	H 1. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学

1993（平成5）年度

氏名	所属研究室	専攻分野	研究テーマ	最終学歴
大窪 康充	第一研究室	仏教学	天台十乘観法の修行規定について	H 4. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
調 晋一	第一研究室	真宗学	善導の観経教判論—楷定古今—	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
三木 彰円	第一研究室	真宗学	真仏弟子—浄土真宗における人間観—	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
山本 和彦	第一研究室	仏教学	インド思想における「非存在」について	H 1. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学

伊藤 暢彦	第二 研究室	教育学	教育の「原理」について—ゲマインシャフト・不二を手掛かりとして—	H 4. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
大橋 洋	第二 研究室	哲学	『悲劇の誕生』における理性の自己批判	H 4. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
山本 和人	第二 研究室	宗教学	宗教学の問題としての millenarianism	S63. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
堅田 理	第三 研究室	日本古代史学	日本古代の地域社会についての一視点	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
西山 進	第三 研究室	東洋仏教史学	『釋門自鏡録』の撰者について	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
吉井 克信	第三 研究室	日本仏教史学	戦国期若狭における真宗教団展開の特質	H 4. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
浅井 千晶	第四 研究室	英文学	センセイション・ノヴェルについて	H 5. 3 奈良女子大学大学院博士後期課程満期退学
小島 明子	第四 研究室	国文学	『増鏡』と擬古物語—恋愛情事記事に関して—	H 5. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
今場 正美	第四 研究室	中国文学	陶淵明の桃源郷について	S61. 3 立命館大学大学院博士後期課程満期退学
河井 純子	第五 研究室	英文学	『アミーリア (Amelia)』における“tenderness”について	H 5. 3 京都大学大学院修士課程修了
村上 昌孝	第五 研究室	サンスクリット文学	<i>Kautiliya Arthasāstra</i> における高官 amātya	H 5. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学

1994 (平成6) 年度

氏 名	所 属 研究室	専攻分野	研 究 テ ー マ	最 終 学 歴
菊地 哲	第一 研究室	仏教学	唯識無境についての一考察	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
調 晋一	第一 研究室	真宗学	一乗海—善導の人間観—	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
三木 彰円	第一 研究室	真宗学	親鸞における人間観	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
御手洗隆明	第一 研究室	真宗学	聖徳太子和讃の一考察	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
山本 和彦	第一 研究室	仏教学	ダルマ (dharma) の概念について	H 1. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
吉田 宗男	第一 研究室	真宗学	『見聞集』における『涅槃経』の一考察	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
大川 清丈	第二 研究室	社会学	近代日本における「公平」観の転換	H 5. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
村山 保史	第二 研究室	哲学	カントの革命論	H 5. 3 関西学院大学大学院博士後期課程満期退学
山本 和人	第二 研究室	宗教学	千年王国運動と歴史—K. Burridge と M. Eliade の研究を中心に—	S63. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
堅田 理	第三 研究室	日本古代史学	日本古代における壘田所有について	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学

西山 進	第三 研究室	東洋仏教史学	『釋門自鏡録』と僧尼報応説話	H 5. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
東館 紹見	第三 研究室	日本仏教史学	空也の活動の歴史的意義について —大般若経供養会を中心として—	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
浅井 千晶	第四 研究室	英文学	Olive Schreiner に関する一考察	H 5. 3 奈良女子大学大学院博士後期課程満期退学
小島 明子	第四 研究室	国文学	歴史物語の「先例」「ためし」 —『増鏡』を中心として—	H 5. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
渡部 洋	第四 研究室	中国語学	諸宮調から見る宋代の動補構造	H 6. 3 大阪市立大学大学院博士後期課程満期退学
河井 純子	第五 研究室	英文学	『ジョナサン・ワイルド』における「偉大さ」 の諷刺	H 5. 3 京都大学大学院修士課程修了
苔口 有加	第五 研究室	東洋史学	清初における多爾袞の漢人政策とその影響	H 6. 3 京都府立大学大学院修士課程修了
村上 昌孝	第五 研究室	サンスクリット文学	『ブッダチャリタ』の「謎」をめぐって	H 5. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学

1995（平成7）年度

氏 名	所 属 研究室	専攻分野	研 究 テ ー マ	最 終 学 歴
加藤不二夫	第一 研究室	仏教学	『成唯識論』の二種生死説について	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
菊地 哲	第一 研究室	仏教学	唯識無境と相違識相智について	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
西坂 孝介	第一 研究室	真宗学	帰命と願生	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
御手洗隆明	第一 研究室	真宗学	『唯信鈔文意』改訂とその背景	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
吉田 宗男	第一 研究室	真宗学	『浄肉文』をめぐる問題	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
大川 清丈	第二 研究室	社会学	近代化と時間意識 —大正期における勤勉の論理の形成—	H 5. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
國嶋貴美子	第二 研究室	哲学	プラトン『国家』篇における〈数学的なもの〉 の問題	H 7. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
村山 保史	第二 研究室	哲学	人間性の社会—カント社会哲学の一解釈—	H 5. 3 関西学院大学大学院博士後期課程満期退学
熊野 恒陽	第三 研究室	日本仏教史学	中世寺院における「本寺」と「末寺」	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
澁谷 由里	第三 研究室	東洋史学	奉天（現遼寧）省における「新政」と辛亥革命—張作霖政権の背景—	H 7. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
東館 紹見	第三 研究室	日本仏教史学	藤原道長の仏教理解 —講会との関わりを中心として—	H 6. 3 大谷大学大学院博士後期課程満期退学
浦山あゆみ	第四 研究室	中国文学	『問奇一覽』切韻捷法について	H 7. 3 大阪市立大学大学院博士後期課程満期退学
奥村 和美	第四 研究室	国文学	家持の造語—カズナシの場合—	H 7. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学

竹村はるみ	第四 研究室	英文学	“In woods, in waues, in warres she wonts to dwell” —スペンサーの女王賛歌	H 7. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
苔口 有加	第五 研究室	東洋史学	順治年間における政権の推移	H 6. 3 京都府立大学大学院修士課程修了
出本 充代	第五 研究室	仏教文学	『アヴァダーナ・シャタカ』の定型句について	H 7. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学
堀川 史子	第五 研究室	英語英文学	Sue Bridehead の人物像再考	H 7. 3 京都大学大学院博士後期課程満期退学